近代本論第二十一回：西郷隆盛の〈敬天愛人〉と等族的カリスマ形成

参考文献

※『西郷南洲遺訓』岩波文庫（１８９６年初版）
※『氷川清話』角川文庫
※『海舟座談』角川文庫
※福沢諭吉『丁丑公論』岩波版福沢選集（１８７７年脱稿、１９０１年発表）
※ハーバート・ノーマン『日本政治の封建的背景』岩波版全集第二巻

西郷隆盛は、イデオロギーにおいては、不可解なほどわかりにくい人物だが、エートスにおいては、逆にこれ以上ないほどにわかりやすい、一貫した人物だった。その核心部には「至誠」がある。これがきわめて純粋に人をうったことから、維新の運動はカリスマ的な焦点を彼の上に結ぶことなる。その意味で、やはり勝は西郷の本質を見抜いていたと思う。

〈西郷におよぶことのできないのは、その大胆識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たった一人で、江戸城に乗り込む。おれだってことに処して、多少の権謀を用いないこともないが、ただこの西郷の至誠は、おれをしてあい欺くことができなかった。この時に際して、小籌（しょうちゅう）（※小さな謀り事）浅略を事とするのは、かえってこの人のためにははらわたを見すかされるばかりだと思って、おれも至誠をもってこれに応じたから、江戸城受け渡しも、あのとおり立談（たちばなし）の間にすんだのさ。〉（『氷川清話』、５５ｐ）

勝は、西郷のイデオロギーにおける曖昧模糊さを、「漠然」という、文字通り漠然として言葉で総括している。しかしその西郷が「機にのってやってきた」時には誰にも止めようがなかった、とも（同上）。これもたしかに西郷の大きな特徴で、彼は機を見るに敏であり（薩摩藩邸をおとりにした幕府挑発など）、きわめて決断力、行動力のある人間だった。行動力に富む維新の志士たちのあいだでも、彼の果断とその判断の的確さはずばぬけており、彼のカリスマ性の成長を助けることになる。その果断性は軍事面、実戦の参謀として最も目立った力を発揮した才能であるが（蛤御門の変、鳥羽伏見の戦い）、それだけではない。制度改革的な処断にも優れていたことは、たとえば明治天皇の親任を得て行った、宮中および最初の軍制としての近衛兵（御親兵）の改革などにも反映されている。組

織者としての才能も豊かだった。それは薩土連合、薩長連合において最も目立った成果をあげたが、その萌芽はすでに青年時代、下級藩士だったころの改革派の立ち上げ（誠忠組）にも見ることができる（これからすぐこの組織のことは検討する）。

彼が最初に漢学に接したのは、儒学の伝統上でもっとも行動的だった陽明学であり、王陽明に対する尊敬の念は生涯失わなかった。それもこの行動性と連動している。しかしその連動も、王陽明の学徒としてではなく、やはりまず彼自身の「誠」の主体性があり、その行動的外化において、陽明と共振していたと考えるべきであると思う。動くべき時には素早く動く、動かないときにはまったく動かなくなる。この動静の独特のメリハリも、西郷固有のもので、やはり「誠」の本質に関係している。

その「誠」だが、これがわたしたち現代人には定位的にも、感覚的にも、もっとも理解が困難な核心部なのかもしれない。ここに西郷という大カリスマの、現象としての力、その事実的明証性を認めつつ、その核心部からの理解が、わたしたちにはこれほど困難となった根本の理由もある。それがおそらく、わたしたちにとっての西郷の遠さなのだろう。しかしともかく、定位構造として、客観化できるところまで、接近だけはしてみよう。

まずそれは、天と己の道として表象される。

〈道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。〉（『西郷南洲遺訓』、１２ｐ）

この〈敬天愛人〉は、西郷のエートス、その〈誠〉の内実として人口に膾炙（かいしゃ）したが、それが〈克己〉に収斂することを知れば、あの松陰の〈修己〉と〈治人〉の二極化をすぐに連想させる。同心円的全体支配の〈修身斉家治国平天下〉の中間部が省略されることによって、個と共同体は直接対峙し、それによって〈草莽〉の世界が始まるのだった。忠孝の強制が希薄なことが、両者に共通する特徴である。

しかしこれだけではまだ、戦前的な精神論との混同は避けられないかもしれない。したがってこの混同を避けるために、まず国体論が固執する「忠孝」がここにはほとんど影を射していないということの意味を考えてみなければならないと思う。〈愛人〉はもともと陽明学的な用語だが、それも仁義忠孝をひとまず超越する、人倫性の普遍的基軸として構想されたものだった。つまり封建的身分制の〈別〉を連結する、そういう〈天賦の人性〉の方向である。このことも西郷はすでに肉体化していると思う。

少し肉声を聞いてみよう。『遺訓』は漢文体の箴言や候文の書簡を集成したもので、文体的には幕末の志士史料の平均値といってよい。しかし中に一つとても面白いものがある。島津久光から二度目の島流しにあい、沖永良部島に牢居中、西郷は地元の子供たちに手習いを教え、島人たちには〈天命〉の話をかみくだいてしてあげた。その際彼が選んだ古典は『孟子』で、これもなにか松陰とのおのずからなる共鳴を感じさせて面白い。『孟子』では、命の短い長いは天命であるから、まずそれを受け入れ、己を律する修身にはげんで、人生の自然な終わりをまつべきだと説く（〈盡心上〉）。西郷はこう読み解く。

〈只今生まれたりと云ふことを知て来たものでないから、いつ死ぬと云ふことを知らう様がない。それぢゃに因つて生と死と云ふ訳がないぞ。さすれば生きてあるものでないから、思慮分別に渉(わた)ることがない。そこで生死の二つあるものでないと合点の心が疑はぬと云ふものなり。〉（同上、〈道教〉、７１ｐ）

〈明鏡止水〉とか、〈死生一如〉とか言うと、ああこれはもう退屈な精神論だなとすぐにわかって……あとはほとんど聞かずに居眠りしてすますと思うが（わたしが寺子屋に通っていたとしら、きっとそうなる）、この西郷の語り口はまったく別物で、面白い。とても親しみが持てる。少し聞くと、あの〈心学講話〉を彷彿とさせるものがあることがわかる。つまり民衆に顔を向けた、そういう易しい語り口である。西郷と下民、民衆の関係は、従来の西郷論においては、観念的であり、実体をともなわなかったと評されることが多い。しかしわたしはこの肉声の中に、はっきりとそれとは別の方向があることを感じる。いわゆる〈別〉がない、〈わけへだて〉がない、そういう〈四民平等〉的な方向。それが〈愛人〉の原点だったのではないか。

するとまた一つ連想が働く。西郷が生涯斉彬公の恩義を忘れなかったのは、そして殉死まで考えたのは、まさにこの〈わけへだてのなさ〉故ではなかったのか、と。こうした親しみをこめた言葉で斉彬は西郷を教え諭し、そして密使として活躍させたのではないか。もしそうならば、通説通りに、西郷の古いメンタリティー、封建的忠誠心（≠主従情念の双数性　→　心中情念との重合）のみを認めようとする旧来の解説は、この主従関係においても、どうやら狭量ではないかと感じはじめる。なにかまったく別の力が働いていた可能性があるのではないか。

死生一如を島民に教えた西郷は、こう続ける。

〈この合点が出来れば、これが天理の在り処にて、為すことも云ふことも一つとして天理にはづることはなし。一身が直ぐに天理になりきるなれば、是が身修ると云ふものなり。そこで死ぬと云ふことがない故、天命の儘(まま)にして、天より授かりしままで復(かえ)すのぢゃ、少しもかはることがない。ちやうど、天と人と一體と云ふものにて、天命を全うし終へたと云ふ訳なればなり。〉（同上）

心学は（特に石田梅岩は）、聖人とわたし、あなたたちを、〈心の同一性〉の直感で結びつけた。西郷は死生と天命の同一性によって、天と人とを結びつける。両者ともに、儒教的な〈別〉を完全に超越、あるいは撥無(はつむ)してしまっている。またこの天人同一性は、倍音のようにアニミズム的神人合一の響きを留めている。これを西郷が南海の孤島で、習俗も本土とは大きく異なる島民たちに、牢の格子越しに話している姿を想像すると、なにか時間の流れがそこで止まっているような、独特の感じに打たれる。

この茫洋とした大きさ、親しみやすさが、西郷の〈誠〉の本体だったと、まず考えてみよう。するとそれがたとえば、盟友大久保のほとんど意識しない近代性（意識しないがゆえにまた本格的、核心的な近代性）と、一種独特の対照性を示していたことがわかる。たとえば勝は、上の引用に続けて、大久保を評し、こう述べている。

〈西郷は、今いうとおり実に漠然たる男だったが、大久保は、これに反して実に截然（せつぜん）と（※きっちりと）していたよ。

官軍が江戸城にはいってから、市中の取り締まりがはなはだめんどうになってきた。これは幕府はたおれたが、新政府がまだしかれないから、ちょうど無政府の姿になっていたのさ。しかるに大量なる西郷は、意外にも、実に意外にも、この難局をおれの肩に投げかけておいて、いってしまった。「どうかよろしくお頼み申します、後の処置は、勝さんがなんとかなさるだろう」といって、江戸を去ってしまった。この漠然たる「だろう」にはおれも閉口した。実に閉口したよ。これがもし大久保なら、これはかく、あれはかく、とそれぞれ談判しておくだろうにさ。さりとはあまり漠然ではないか。しかし考えてみると、西郷と大久保との優劣は、ここにあるのだよ。西郷の天分がきわめて高い理由は、実にここにあるのだよ。〉（『氷川清話』、同上、５５ｐ）

この比較自体、とても印象的だが、『遺訓』を調べてみると、西郷は人材採用の自分の基準を持っていたことがわかる。そこでは、君子と小人では用い方が違う、小人は細かなことでは小才が利くから、そういう部署につけるべきであるし、そもそも世の中は「開闢以来」、十人に七八人は小人だからそれでよい。しかし決して上にたてるべきではない。そう藤田東湖先生も述べられたと結ぶ（『遺訓』、７ｐ）

つまり西郷は勝を君子として遇した、人の上に立つべき人間だと見たということがわかる。そしてこの弁別は、大久保との比較において、共通性と違いが際だつ。つまり大久保的官僚制は、君子と小人をひとしなみに同一のルールに従わせるがゆえに、近代的に機能する官僚制なのである。分析し総合する。解体し組み立てる。これがデカルト的〈方法〉の要諦だった。大久保も、幕藩的官僚を〈解体〉し、きっちりとした要素の組み合わせとして、近代官僚制を〈組み立てる〉。

この大久保的組織の「截然」たる部分は、西郷も知っている。彼も才気ある「小人」はそういう風に使いこなすべきだと思っている。しかしその論理がまったく異なる。それは「小人」を上に置くと、とんでもないことになるからだった。だから才気を実務で発揮させ、その野心や恣意はルールで縛って使いこなすべきである。これを彼は封建官僚制の最底辺での体験（書記役）で、知悉している。勝は君子大人で、人の使い方はこころえている。上に置いてもまったく問題を起こす人間ではない、だから「なんとかなさるだろう」なのである。これは「漠然」ではない。西郷なりの「截然」である。しかしそれは、大久保たち開明官僚がめざした即物的効率性とは、どこかはっきりと異なる。ここまでをまず確認しておこう。同じ文脈で、例えば明治以降の有司たちの腐敗を激しく批判している（これはすぐあとで検討する）。

これもまた西郷論で軽視、あるいは無視されるポイントだが、征韓論での下野、そして大阪会議で特に板垣が西郷の再出仕を熱望し、その根回しをし続けたにもかかわらず（一八七五年一月～二月）、政府と距離を置き続けた真の背景には、この有司的恣意性への批判があったのではないかと思う。いわゆる〈モラルの低下、あるいは解体〉を彼は初期明治政府に感じ続けたのではないだろうか。つまり〈誠〉の定向的減退である。そして動静

のメリハリが彼の一貫した行動基準であったことを思い合わせれば、この動かないこと、つまり出仕しないことが、最大の批判となりうることもすでに熟知していたように感じるのである（これは西南戦争前夜における彼の奇妙な沈黙においてもまた繰り返される）。

西郷のカリスマ性を考える場合、わたしたちは、西南戦争で史上の西郷が倒れてから始まった、後日譚を省略するわけにはいかない。特に憲政を基軸に戦前の定位史を概観しようとするばあい、その憲政を裡側から切り崩した在野の勢力として、黒龍会、玄洋社を代表とする反・政党運動を無視できないからである。そして西郷はその在野右翼の元祖であるかのように崇められ、特異にイデオロギー化されたカリスマとしての力を隠然とふるうことになった。これも歴史上の事実であり、まずそのことを客観的に認知しなければならない。彼等が西郷をどこまで理解していたか、どれだけ本当に西郷的伝統に戻ろうとしたかは別問題として、彼等にとって西郷は、ちょうど西郷たちにとって〈錦旗〉が果たしたのと似た求心的なイデオロギー機能を果たしていた。それは事実であり、史実である。

その場合、戦後のわたしたちの目から見て、西郷評価のパターンは三つに分かれるように思う。まず史上の西郷のカリスマがそのまま右翼運動に受け継がれたとする立場。これが１．全肯定（右翼寄りの）と２．全否定（左翼寄りの）にわかれる。これを踏まえた立場は、３．史上の西郷と事後的な右翼運動の間にはたしかに系譜性はあるものの、歴史的事象としては、両者は別々に考えるべきであると見る。わたしはこの立場である。その根拠は、単純に、幕末維新のカリスマ力学と、憲政崩壊時のそれは、背景となる歴史状況が相当に違うからである。もちろんいくつかのモメントは系譜性を持つ。しかし中核のエートス像、たとえば〈至誠〉は決して同一ではない。

しかし、ＧＨＱのブレーンの一人として、日本における軍国主義の解体をめざしたハーバート・ノーマンは、西郷と右翼運動を同一視する、そして批判的に見る立場（上掲の２）だった。彼は軍国主義のルーツに「根強く残存する封建性」を認識し、その核心部に西郷のカリスマを認めたからである。したがって、西郷もまた、「反動」そのものであるとされる。

〈いかなる国、いかなる時代においても、またおそらく日本においても、反動が西郷のように完璧なシンボルをもちいえたことはほとんどない。〉（ハーバート・ノーマン『日本政治の封建的背景』第三章〈士族反対派〉、１７７ｐ）

もちろんノーマンとＧＨＱの意図は、そのシンボルに呪縛された黒龍会や玄洋社をはじめとする軍国翼賛的な右翼運動を根絶することであった。したがって彼の見る西郷は、そのシンボル形成過程、つまりカリスマ形成の中核であり、系譜的源泉である。このカリスマの実体は、彼には根拠薄弱な〈神話〉に見えるから、それは勝とはちょうど逆のアングルから、「近代化の最大の功労者」、大久保と対比されることになる。

〈近年でも、鹿児島にある大久保の家を町の人間は弁解めいた、または非難めいた言葉で外来者に指し示すのである。反逆者西郷への崇拝と政治家大久保への無視とは歴史における神話の勝利にほかならない。〉（同上、１４８ｐ）

これはしかし、ノーマンの短絡であると思う。西南戦争のあとしばらくは、西郷ははっきりと反逆者あつかいだった。それは福沢諭吉が憤慨して戦争直後『丁丑公論』を書いたことでも窺える。そこでは西郷は専制に抵抗したのだという、きわめて注目すべき言葉も見える。

〈世間に専制の行はるる間は、これに対するに抵抗の精神を要す。……西郷氏は政府に抗するに武力を用ひたる者にて、余輩の考とは少しく趣を異にする所あれども、結局その精神に至つては、間然すべきものなし。〉（福沢諭吉『丁丑公論』、西郷、６ｐ）

勝らの復権運動が実って、西郷が〈朝敵〉の汚名を除かれたのは、憲法発布にともなう大赦のおりであり、西南戦争から十年以上もたっている。福沢はそれからさらに十年して、ようやくこの擁護論を発表したのだった。当時は世間にはばかるところがあったからだと、序文でわざわざ断っている。つまり世論は最初西郷に対して福沢も憤慨するほど、忘恩的であり、短絡的、かつ全否定的であったことがわかるのであり、西郷の第二の（死後の）カリスマ形成は、それよりあとに、ゆっくりと進行していったことが確認できる。したがってその形成要因は、ひとまず彼が生きていた時代の、幕末維新でのそれとひとまず分けて考えるべきだと思う。もちろん両者はまた系譜的に複雑な化合を起こしていることもたしかだから、それはそれとして、その右翼運動の中で解析を試みることになると思う（本書の後編での検討を予定している）。

ノーマンに戻ると、彼の維新研究の欠落は、まさに西郷を正しく評価できなかったことに拠るのではないかと思う。たとえば、まったく初歩的なミスを犯している。ノーマンは、坂本龍馬を高く評価し、彼は封建制の頽廃と専制の弊害を正しく認識していた点で、同時代の政治的知性の中で群を抜いた存在であると賞賛する（わたしも概ねこれには賛成する）。そしてこう続ける。

〈坂本は西郷の個人的勇気と謀略の才能を評価しながらも、他の同時代人とはちがって、西郷の頭脳には決して感心しなかった。ある時、かれは西郷を評して「馬鹿は馬鹿だが、大馬鹿だ」といったことがある。〉（ノーマン、同上、１６３ｐ）

これは完全におかしい。ノーマンが目にした史料が何かは分からないが、その元となった逸話は『氷川清話』に収録されている。

〈坂本龍馬が、かつておれに、「先生はしばしば西郷の人物を賞せられるから、拙者もいって会ってくるにより添え書きをくれ」といったから、さっそく書いてやったが、その後、坂本が薩摩から帰ってきていうには、「なるほど西郷というやつは、わからぬやつだ。少しくたたけば少しく響き、大きくたたけば大きく響く。もしばかなら大きなばかで、利口なら大きな利口だろう」といったが、坂本もなかなか鑑識のあるやつだったよ。〉（『氷川清話』同上、５５ｐ）

これは勝があの西郷の〈至誠〉を要約する、その直前に紹介される逸話である。勝も坂本も西郷の器の大きさ、そのカリスマ性を認識しているのであって、もちろん〈大馬鹿〉はその賞賛の言葉である。

これはノーマン的な分析の限界、臨界をよく示す事例ではないかと思う。近代国家の概念類型において、彼に法治の節目、つまり立憲の節目が見えていないことはすでに指摘した。それはいわゆる〈左派〉における法治の軽視、無視と連動していること、それもすでに述べた。しかしその瑕疵は瑕疵として、ノーマンの日本近代の出発点である維新変革の分析はいまだに範例的な位置を保ち続けている（この範例性に関しては、拙著『近代日本研究の方法的基礎』を参照されたい）。そしてすでに本論考でも述べたように、農村、農民問題を近代日本国家の核心的問題ととらえたことも、慧眼であるという以上に、歴史の真実そのものであると思う（したがって終戦後の農地改革も、真実の改革である）。

しかしノーマンには、維新のエートス的力学がまったく見えていない。それはもちろんその核心部にいた、ハブの中心部にいた西郷の大きさ、実体的な歴史造形力としての、こう言ってよければ、リアルタイムで働く、それも絶大な力ではたらく〈志士のカリスマ力〉というものを理解できていないからである。理解できていないというより、そもそもそれを見る目が欠落している。そしてこの欠落は、歴史を主体的な定位史としてとらえようとするわれわれの立場からは、致命的な欠損である。

このことに関しては、より原理的な視座からの批判が必要だし、また可能だと思うが、いまは西郷のエートスを確定的にモデル化することが本題であるので、ここでは省略する。しかしこの指摘は、もちろん表層的な揚げ足とりではないし、また〈本国人にしか分からない繊細微妙なニュアンス〉などでもない。そのことだけはわかっていただきたいと思う。欠損はノーマンの前提とするイデオロギー史、制度史のおそらく根幹部分に埋め込まれた欠損であり、それがこうした見やすいエートス現象に対する盲目を生むのである。

再び西郷にもどるならば、彼の場合、エートス的統一性（〈至誠〉）が、そのまま機敏な行動、あるいは独特の静止（ある意味、〈動かざること山の如し〉の風格を持つ）へのメリハリへと通じることが特徴的で、イデオロギーは、信念というよりは、より実戦的な行動の指針というほどの簡便さで使いこなされていることが特徴的である。これはたとえば、〈攘夷〉をめぐるプラグマティズムで紹介した木戸（桂）の場合よりも、さらに実戦的、即物的な側面を持っており、だからこそ同時代の動乱、またイデオロギー的混乱、勤王と佐幕、開国と攘夷がめまぐるしく揺れ動く中で（特に蛤御門の変からの数年で）彼がつねに維新と国家統一運動の中心に立ち続けた、真の理由であると思う。

これをよく示すのは、勝との初対面のおりに示された、彼のある意味での変わり身の早さである。その変わり身はまた、当時の動乱状況を写像したような意味もあるので、それを簡単に復習しておこう。

まず一八六二年（文久二年）薩摩藩主の後見役（つまり実質の藩主）島津久光が、亡兄斉彬の意志を継ぐ形で、〈公武合体〉とそれと連動した〈慶喜擁立〉に動く。その江戸からの帰路、あの生麦事件が起こった。当時西郷はまだ久光の逆鱗にふれたまま、沖永良部島で島民を相手に手習いや、『孟子』講話の最中だった。翌一八六三年になるとしかし、

八月十八日の政変で長州攘夷派は朝廷から排除されたものの、京都は騒然となり、しかも薩英戦争が起きて、久光は帰国せざるをえなくなる。

朝廷と幕府の両者を中つなぎして、薩摩の発言力を強めようとする政治路線は、義兄の斉彬が敷いたもので、久光はその上に乗ったのだが、いかにも器量不足だった。そして必須のピース、交渉役が欠けていた。それがつまり西郷だったのである。西郷の〈お庭番〉、つまり密使としての役割は、一八五四年に始まるが、この年に藤田東湖、翌年に橋本左内と面談した頃から、尊皇、攘夷、そして公武合体や慶喜擁立をめぐる複雑な運動に積極的に参加していくようになる。斉彬もその成長を喜んで、対外交渉の参謀として、ほぼ一手にそのネットワーク自体を統括させるようになった。したがって、久光が私怨に近い憎悪を以て西郷を遠ざけたこと自体、最初からこの上洛運動の失敗を予定するようなものであった。一度西郷を呼び戻しかけたが、寺田屋の尊皇攘夷グループを西郷が後ろで煽動しているのではと疑って、再度流刑処分とする。しかし京都の無政府状態はつのるばかりで、自暴自棄に近い状態になった久光は、再度西郷を赦免し、上洛を命じ、少ない藩兵を西郷の上に丸投げして、自分は薩英戦争後の混乱の処理に急遽帰国する。

この二度目の流刑時に、西郷は小規模ながら、奉行的統治の才覚を見せている。最初見せしめの酷刑に近い状態だったのが、徐々に待遇が改善してくると（久光の西郷に対するアンビバレンツが投影されていたのだろう）、地元の代官と一所に、窮民救済のための社倉を設けている。塾も大きくなり、塾生は二十人を数えるようになった。この代官も左遷されてきた人物で、西郷にはゆかりの人物だった。桂久武（一八三〇～一八七七）といい、彼の兄、赤山靭負（一八二三～一八五〇）の切腹が、西郷が設立し、大久保が参加した精忠組の機縁を与えている。この西郷的治世の実験も、短いエピソードとして済まされることが多いが、わたしは西郷の主体的統治の実験として、かなり重要な体験だったように思う。

離島で同志とともに賑恤にはげむ西郷には、藩政改革の動因も、郷士としての支配スタイルも、またもちろん勤王的王土も、すべて欠落しており、薩摩の半ば植民地だった島嶼において、その苛斂誅求に苦しむ民を相手に行った直接的な救済策だった。それはやはり彼における〈愛人〉、〈愛民〉の自然な実践だったのではないかと思う。そこに幕末維新で沸騰する国家草創的なイデオロギーがほとんど欠如していることを、逆にわたしは貴いと思うし、それがまた彼の〈至誠〉の一つの可能性であるように感じるからである。島嶼において、西郷のカリスマ性の記憶は長く保たれたが、それは賑恤の〈遺徳〉に対する思慕であり、〈維新の元勲〉に対する臣民的敬意ではなかった。これもまた〈志士〉的定位において、西郷が例外的に示す民衆との親和性、近さであると思う（このモメントも、ノーマンたちはすぐに〈薩摩郷士の階級的苛斂誅求〉の枠に収めて捨象、あるいは矮小化してしまう）。

ともあれ、久光は丸投げした京都の収束に西郷を必要とした。二月に鹿児島に上陸した西郷は、翌三月には京都に到着する。京都では長州派、攘夷派の反撃が目前に迫っており、薩摩方の評判は極めて悪かった。久光のどっちつかずの態度、特に寺田屋事件を廻る誅殺が攘夷派の心底の怒りを買っていたからである。西郷は朝廷の命を待つということにして、

事態の鎮静化をはかる。まったく動かずに、ひたすら薩摩兵の軍規を統一することだけをめざす（彼が実質の司令官だった）。

そういう中、いよいよ事変が突発した。この蛤御門の変（禁門の変　一八六四年八月二十日）は、新撰組の挑発で始まり、それに怒った幕府方が朝廷に強い調子で臨むという段階にいたる。ここではじめて、朝廷と幕府のつなぎ役を長年（重豪、斉彬以来）勤めてきた薩摩にお声がかかった。西郷が御所に呼ばれる。西郷は、長州がかならず〈暴発〉するはずだから、そうなれば長州征伐の大義名分も立つ、と大局を見すえた進言を行い、朝議を納得させた。かつての一藩主の使い走りが、維新の表舞台に粛然と登場した瞬間だった。

これからの西郷の果断は、軍事的司令官としてのそれである。長州方が攻め寄せる蛤御門を薩摩の受け持ちとし、戦の帰趨を実質一日で決めてみせた。直後に第一次征長戦争が始まると、総督は尾張藩主に、総参謀は西郷に任じられる。翌八月に下関の砲台は四カ国連合艦隊に砲撃されて占領される。西郷はこの機にのって、長州に攻め入ろうとし、その前に幕府の海軍奉行として神戸にいた勝と面会した（伝習所以来の関係があった税所篤（さいしょあつし）が仲介したものと思われる）。この面会が西郷の征長の考えを急進から穏健へと百八十度転換させた。勝が〈国家主義〉の見地から、公平に時局を展望して見せ、幕臣にもかかわらず、幕府の衰退ぶりを暗示したのが大きかったのではないかと推測されている。西郷は、「長人の所置は長人に付けさせる」ことを考え始めた（大久保利通宛て書簡）。包囲はするが、攻め込まずに、責任者の処断を長州に任せるというのである。すでに薩長連合の可能性を秘めた決断だった。

諸藩との参謀会議が開かれると、西郷は長州が謝罪処断すれば、すべてを赦免することを基本とすべきだと主張した。ここでまたさらに、西郷は実戦派らしい処置を見せた。こうした寄せ集めの軍勢は、進軍の序列争いが起きやすい、だからまずばらばらでも出発し、合戦場につけば、総督の判断で陣立てを決めればそれでいいと、看板にすぎない総督に華をもたせたのである。感激した総督は脇差を西郷に賜り、「これからもがんばってくれ」と激励した。烏合の衆になりかねない寄せ集めの軍は、こうして彼の指揮下に入り、たいしたもめごともなく進軍を開始した。

この素早さ、激動する状況に対する判断の素早さと的確さには、強い感銘を受ける（足も満足に立たなくなったような流刑から帰ってきて、わずか半年である！）。これほど大きな局面において、これほど輪郭がはっきりした行動性は、おそらく他の志士に求めても得られない。彼一人の傑出した才能である。ここにも、維新革命が絶対的に彼を必要とした、内在的な要因があると思う。同じ位置に、大久保や、勝や、木戸や、坂本や、高杉を置いても駄目である。これははっきりしている。しかしどうしてはっきりするのか……それが難しい。それが結局西郷の同時代人にとっての、そしてわれわれにまで引き継がれた賛嘆を込めての、理解の難しさであると思う。

同じ実際知は、より大きな規模で戊辰戦争の際にも発揮された。西郷は大総督府参謀（三軍の総参謀）への就任を固持し続ける。自分は薩兵をまとめるのに精一杯だからと言うのである。最後の最後に承諾し、こうして戊辰戦争の総元帥としての大西郷が、〈錦旗〉を押し立てて東に向かうという、歴史的心象が生まれることになるのだが、これもまた烏合の衆になりかねない官軍をまとめるための方策であったことは確実である。自分が推され

るまで待つというと、単なる派閥政治のやり手に過ぎない。しかし西郷の場合は、実際知として、こうしたやりかた以外では薩摩の主力軍が目立ちすぎる、それが事後的に悪い作用をするかもしれないというところまで、ちゃんと見すえていた。これは近衛師団の前身にあたる御親兵の創設をめぐる紆余曲折で、彼が示したバランス感覚にもよく示されていると思う（長州からの提案であったにもかかわらず、最終的には薩長土からのバランスを保った召集に応じた）。

冒頭で述べたように、西郷のイデオロギーは漠然としているが、それとは対照的に軍事の実際、また政策の運用に関しては、非常にメリハリのきいた実際知と決断力を示す。それでも、この方面でもまた「凡眼」からは、半ばは漠然と見えるのは、あの「静止」がからんでくるからで、ひとたびこの「静止」の背景となる実践的意図の介在に気がつけば、それはすくなくとも一般的イデオロギーにおける彼の茫洋、曖昧模糊としたわかりにくさとは別次元のものであることに気づく。この「静止」の意図は、彼の最大の「静止」、士族反乱の多発から西南戦争の「暴発」に至る真意の推定に際して、最重要のモメントとなる（すぐあとでこの難しい問題は、試行的に検証を試みることにする）。

一言この独特の実際知と果断性、そして茫洋さの並存に対して注意しておくと、それは薩摩藩との封建的主従関係において錯綜したものとなった結果では決してない。彼が認めた本質的な関係は、薩摩藩ではなく、主君斉彬、そして盟友月照に対する双数的な盟約関係だけだった。彼の漢学から合成される自己倫理に、いかにスタンダードな修身斉家治国平天下、また忠孝が希薄であるかはすでに見たとおりである。彼は一度として、薩摩藩に対する忠誠を自己の行動原理としたことはない。これから簡単に整理するが、薩摩藩はそれを許さぬほど複雑で内部分裂した藩であり、したがって彼はその藩のどの部分に希望と未来を見いだすかという主体的選択を、非常に早く（誠忠組組織の段階で）行っているのである。

これは一つの定型になっているのだが、脱藩寸前までいった大久保利通は、早くから藩への忠誠を捨てており、したがって藩主久光に対する関係も、合理的、大局的見地からの操作に終始した。しかし封建的忠孝の心性にどっぷりと浸っていた西郷には最後までそれができなかったという対比。これを専門の近代史家も無批判に受け入れてしまうことがあまりに多いように思う（ノーマンの「反動の首魁」というタグ付けもその延長上にある）。大久保の自立性は、おおむねそれでよいと思う。ただ西郷は、その大久保の自立を助ける立場にいたのであり、自立といえば、彼の方が早く、また徹底していたのである。しかしその自立はイデオロギー的なそれでなく、エートス的なそれであるために、わかりにくく、しかしまたわかりやすかった。当時の志士たちに与えた西郷（の至誠）の強い、一貫した印象は臨機応変の実際知において分かりやすく、逆に、それがほとんど無イデオロギー的であるがゆえに、わかりにくかったのである。

この西郷における定型的封建心性の根強い残存という論題は、繰り返されてきた、ほとんどクリシェーとも言える説明形式である。それがまた西郷という史上の存在の全体的理解を難しくしたポイントの一つだと思うので、傍証を援用して、わたしの主張を補強しておこう。それは薩摩内における、西郷の評価の低さである。西郷がもし藩に忠誠を誓い続

けた人間ならば、こういうことは起きていないはずだが、勝はある時、そういう〈藩内実力者〉たちと会った印象から、その西郷の評価の低さにあきれて、こう述べている。

〈元来、薩州の風として、親方株は、若いものだといえば、その賢愚を問わずに、すべてこれを風下に置いて、いっこう重く用いないという癖があるのだ。
昔おれは、薩州の国家老や、幅利きの親方株にあって、いろいろ国事上の話をしてみたが、もちろんその話の中には西郷のことも出た。しかるに、彼らのいうには「えい、あの吉之助めのことでござるか。あれはまだ青二才でござる」と一言のもとに西郷を振り捨ててしまった。ところがなかなか、おれは薩州へ下らない前に、かねて西郷と腹を合わせて、種々の打ち合わせをしておいて、しかして薩州に下り、二人で着々それを実地に行ったのだ。それをも知らずに薩州の親方株は、あのようなことをいって、一人でえらそうに思っているからおかしいではないか。〉（『氷川清話』、２００ｐ）

これは勝が新政府の海軍に関係していた時代で、明治六年に島津久光を上京させるための勅書を携えて鹿児島に行った際のエピソードのようである。新政府は、〈米欧回覧〉の留守政府として、視察組との事前の合意に基づき、ちょうど徴兵、地租改正、教育制度の確立を三本柱として集権体制を整えていた最中で、まさに征韓論政変が起こる直前のことである。これも少し記憶にとどめておきたいポイントだが、ここで西郷と勝がいっしょになって、その集権に向けた藩内調整を（古株をつんぼさじきに置いて）行っていた事実は、征韓論で下野した西郷が鹿児島でどういう位置にあったかを考える際の前提として、意外と重要ではないかと思う。つまり薩摩の封建的遺習はまだはっきりと残っており、西郷も、西郷を崇拝する私学生の若者たちも、それとは別のところで強固な師弟集団を形成していったということである。これを抑えておかないと、結局西南戦争の位置づけ自体がまた、近代国家対封建的士族の最終対決というクリシェーにはまってしまうと思う。
徐々にではあるが、西郷のエートスの核心部、その特異性の示す、維新的共根性は見えてきたと思う。たとえば〈至誠〉は、勝の行動指針でもあった。もう一つ、勝と西郷に共通するのは、行動における無私性、無心性である。勝はこれを自分の修養した剣禅の成果だとし、とくにそれが〈外交〉の要諦だと考えた。

〈心は明鏡止水のごとし、ということは、若いときに習った剣術の極意だが、外交にもこの極意を、応用して、少しも誤らなかった。こういうふうに応接して、こういうふうに切り抜けようなど、あらかじめ見込みを立てておくのが世間のふうだけれども、これが一番わるいよ。
おれなどは、何にも考えたり、もくろんだりすることはせぬ。ただただ一切の思慮を捨ててしまって妄想や邪念が、霊智をくもらすことのないようにしておくばかりだ。……
外交の極意は、「正心誠意」にあるのだ。ごまかしなどをやりかけると、かえって向こうから、こちらの弱点を見抜かれるものだよ。〉（『氷川清話』、１５４ｐ）

勝は剣禅を基底として、そこに蘭学的合理精神を応用することができた。その基調、出発点はしかし、あの「手捕」と同じ、アド・ホックな行動精神であり、これはほとんどすべての〈志士〉が共有する時代のエートスだった。勝はしたがって、もっと一般化してこうも言っている。

〈なんでも大胆に、無用意に、打ちかからなければいけない。どうしようか、こうしようか、と思案してかかる日にはもういけない。むずかしかろうが、やさしかろうが、そんなことは考えずに、いわゆる無我という心境に入って、無用意で打ちかかっていくのだ。〉（同上、２３７ｐ）

剣と禅にそれほど親しまなかった西郷も、〈至誠〉を鏡のように磨くことで、ほぼ同じ境地に達していたことがわかる。そして彼の場合には、もう一つ、根本的な実存性がそこに重合していた。それは、〈死に遅れた男〉の死生一如のまなざしではなかったかと、わたしは感じる。彼は斉彬に殉死しようとして止められた。死に遅れた。彼は月照と心中入水し、一人助かった。死に遅れた。そして最後の死に場所として望んだ、対韓特使を拒まれた。死に遅れた。この独特の超越性が、彼のカリスマ性を一回的に造型していったとわたしは感じる。

これは論じることのかなり難しいテーマである。しかしそれは、一見してそう思えるかもしれないが、『葉隠』的な死生と重なるからではない。わたしは、これも少し奇妙な感覚かもしれないが、『葉隠』の〈武士道とは死ぬことと見つけたり〉という人口に膾炙した（膾炙しすぎた）ドグマは、同じ書物の中にある〈世はすべてからくりなり〉という、元禄的ニヒリズムと表裏一体となった、一つのポーズではないかと感じる。それは根底的、実存的なエートスに似て、しかし非なるものである（説明は非常に難しいが、直感的にそう感じる）。それに対して、西郷の〈死の契り〉は、実体的であり、実存的双数性（相対（あいたい）の感覚）に貫かれている。それが彼の〈死に遅れ〉を真正の〈誠〉へと変容させていく動因となったと思う。彼に対した人間は、すべてこの〈世界にいて世界にいないような男〉の茫然とした茫洋とした曖昧さと、しかし鋭く切り込んでくる、あるあらがいがたい力を感じたのではあるまいか。

これが難しいテーマだということは、もうおわかりいただけたと思う。黒龍会や玄洋社につながる在野右翼運動が、すべて権力妄想から生まれたのならば、ノーマン的な観点からひとまとめに〈反動〉として断罪することも容易であると思う。しかしその根底の潮流には、確実にこの西郷の〈至誠〉をめぐる、独特の超越性、その死生一如も流入している。その意味では、たしかに彼らは西郷の死後のカリスマに、〈真正に〉巻き込まれていった、そういう実存でもあったのである。したがって、その歴史的評価、そして〈理法の法廷〉における判断は非常に難しくなる。この事実をあらかじめ認めておこう。

それだからこそ、なおのこと、このカリスマの本源である、西郷のペルソナ構造、そのエートス的定位の内実を裡側から理解することが不可欠なのだと思う。日本における近代的心性の自己展開そのものにとって、本質的なのである。すでにその難しさは十分に、この右顧左眄するわたしの解析の文体の逡巡そのものが示してしまっていると自覚するが、

ともかく、公正の、公明の精神をもって、試みは続けなければいけない。西郷を理解せずには、維新革命を内在的に理解することはできない。もし維新革命を、その肯定面と否定面、あるいは世俗面と超越面を含めて理解できなければ、けっきょく日本近代国家も、その基軸となるべく生成してくる立憲の過程も、正しくは理解できないからである。

立憲の過程と西郷の精神、これほど異なるものはないように思える。しかしそうではない。西郷が維新前夜にイギリスの代議制に強い関心を持っていたことはすでに見た（第四章第二節）。それは文明圧の背後にある制度を知ろうとした、やはり軍略的なものだった可能性はあるにしても、しかし知識としての客観性を求めていたこともほぼ確実である。そして彼は、木戸と大久保が中心となってプラニングした近代国家の集権的草創にも、彼の知悉する軍事の方面での協力を拒まなかった。したがって近代国家と西南戦争を敵対的に見る、これまでの定説的理解は、はやり偏頗なものであった可能性は皆無ではないと思う。西郷自身が近代化に敵対的だったことは、少なくともその言動のどこからも見えないからである。

この背景を置いて、征韓論の下野から西南戦争へと至る過程をまず概観し、ついで維新革命の全過程における彼の活動を参照するならば、その時はじめて西南戦争の偶有性のみならず、そのある種の必然性が発見できるかもしれない。その過程で、西郷と近代国家を包摂する、新しい定位範疇が発見されるかもしれない。発見されないかもしれない。しかし総合的定位の理解は、あくまでこの発見をめざすべきである。その格率にしたがって、試行を続けることにしよう。

まず彼の主体的定位の出発点、誠忠組の組織と、それが置かれた薩摩藩の特殊な状況を正しく理解することが必要である。これがまたなかなか込み入っていて、ややこしい。

西郷と大久保の時代、薩摩藩はお家騒動を二度体験した。最初のものは、すでに一度登場した〈近思録崩れ〉（一八〇八〜〇九年）で、これは二人の時代より遠いが、しかしその余波の因縁が廻ってくる。お家騒動そのものは、〈蘭癖〉のある藩主重豪を隠居に追い込もうとした実務派の敗北に終わった。実務派はもっと藩政に顔を向けてくれそうな重豪の子、斉宣に望みをかける。彼等の献策は、天保の藩政改革のプロト・タイプだったが、重豪派の逆襲にあって中心メンバーは切腹、斉宣は隠居、その子の斉興（斉彬の実父）が藩主となる。重豪は実権を握り続けたが、浪費はさすがに控えるようになった。

次のお家騒動は、藩主斉興と家老の調所広郷が成功させた天保の藩改革をはさんで、その因縁含みで起きる。またここでも父子の対立が起こり、これに正室、側室の嫡子権の争いが加わって泥沼化する。対立したのは斉興と斉彬の父子であり、斉興が寵愛した側室がお由羅の方、その子が久光だった。斉彬は正室嫡男であるにもかかわらず、四十前後まで襲封（藩の相続）を明確にしてもらえず、つねに異腹の弟久光に嫡子の座を奪われるのではないかという危機感にさらされていた。

斉彬にも〈蘭癖〉が噂され（たしかに洋学一般への強い関心は、斉彬をかわいがった曾祖父の重豪から受け継いでいた）、それがまた重豪当時の浪費、藩財政の圧迫を予想させる。そのため財政派（その代表は調所）は、斉興と久光を支持するようになる。一方、斉彬のもとには藩内の改革派が集結する。若者たちが血気にはやって行動を起こそうとしたため（お由羅の方を暗殺しようとしたらしい）、斉彬派は一網打尽となり、首謀者は切腹

を命じられ、党派はほとんど解体の憂き目にあった（一八五〇年）。ここで最後の手段として、老中への仲裁（開明派の阿部正弘がすでに実権を握っていた）を斉彬派が依頼し、裏工作もあって、きわどいところで久光擁立派は敗北し、斉彬の襲封が実現する（一八五一年）。

この二つのお家騒動が、西郷が中心になって組織した誠忠組の背景である（〈誠忠組〉は、〈精忠組〉とされることもある）。まず久光廃嫡の決起に失敗した若者が切腹した時、その介錯をしたのが西郷の父だった、そしてその血染めの衣を西郷に示したと伝えられる。その切腹した若者が、斉彬派の中心の一人であった赤山靭負（ゆきえ）であり、西郷が沖永良部で出会う代官、桂がその弟であることは上に述べた。西郷の父が実際に介錯をしたかどうかは、異説もあるようだが、ともかく西郷はこの事件に強いショックを受けたようである。そして〈近思録崩れ〉の改革派の中心だった家老秩父季保（すえやす）を偲びつつ、『近思録』の勉強会を組織して、大久保たちを誘った。これが〈誠忠組〉の起こりである。誠忠組はいわば地下組織であり、斉彬の襲封を願う改革派の集会を〈近思録〉派をまねて、『近思録』の勉強会という形で行ったのだった。

西郷はもちろんすでに陽明学を学んでおり、『近思録』を選んだからといって朱子学に鞍替えしたわけではない。儒学古典はあくまで改革派ネットワーク形成の口実であり、その口実の選び方も、改革派自体がそれを用いた故事にならったものだった。この主体的な経書の選択、また党派の選択は、西郷において特徴的な漢学のプラグマティックな活用法をよく示していると思う。誠忠組という名称も、一種の隠れ蓑であり、忠義という名目が、名君斉彬による改革を望むという藩内の〈維新〉の願望と融合一体化していることがその内実であることは明らかである。ここにも、あらためてもう言うまでもないと思うが、国体派が絶対化していく、朱子学的忠孝とはまったく異なった、君臣関係の主体的選択が隠されている。斉彬はまだ藩主ではなく、一年後にかろうじて襲封されたとはいえ、当時の状況は（誠忠組組織時の状況は）かなり絶望的だった。したがって彼に対する〈忠〉は、制度的、惰性的忠孝ではなく、主体的に再選択された新しい君臣エートスであり、その内実は、〈勤王〉に似た抽象性を有していることがわかる。

斉彬が奇跡的に藩主となった後も、下吏としての貧窮生活は続くが、これが大きく変わったのは五十三年、黒船来航と連動していた。翌五十四年、斉彬の参勤交代に際して上書、随伴同行を願い出、認められた。そればかりか特に〈御庭番〉に取り上げられ、斉彬に親しく教示されつつ、密使の役を徐々に任されるようになったことはすでに述べた。これははっきりとした史料に出会ったことはないが、おそらく〈誠忠組〉の噂を斉彬が聞いて、西郷たちに関心を持ったからではないかと思う。その証左は、西郷だけでなく、大久保もはじめて活動の場を与えられていくからである。

さて、こうして西郷の目覚ましい成長がはじまる。それは衆目認めるところ、時代の名君斉彬が、西郷に眠っている才能を呼び覚ましたからだった。再び勝の証言を挙げておこう。

〈薩摩の順聖公（島津斉彬）は、エライ人だった。……西郷はその庭番をして、ジカに度々お目にかかり、一々指図をされ、過激の事を言っては打叱られ、その教育を受けて人物となったのだ。〉（『海舟座談』同上、２０１ｐ）

御庭番は、幕府の役職であり、密偵、間諜を実体としていた。設置したのは将軍吉宗であり、主に江戸城内の情報収集を行ったようである。薩摩でこの役職が設けられたのはいつごろか手元の資料ではわからないが、おそらく幕府との交渉が繁くなった重豪頃からではないかと思う。そして斉彬は、西郷の実際の活動を見てもわかるように、はっきりとこの役を〈密使〉として特化させている。ここにも斉彬の幕末名君としての開明性が顕れているように感じる。つまりもう受け身の情報収集だけでは足りず、積極的なネットワーク形成が不可欠な時代になったことを、彼自身痛感していたに違いないからである。ただし密偵、間諜時代の御庭番と同じく、西郷の役回りもあくまで非公式のものだった。そして主君の斉彬との固い絆もまた、役職を越えた双数性、相対（あいたい）性を見せることになる。

これもまたしかし、斉彬は織り込み済みで、だからこそ特にそれに適した才能を持つ西郷を選んだのだと思う。一歩進めれば、斉彬自身、西郷の視野の独自性を楽しみ、そしてそこから学ぶことも、特にその活動の最後の時期には多かったように感じる。斉彬が活動資金をほぼフリーハンドで与え、そして西郷自身が構築するネットワークをも積極的に活用した形跡があるから、余計このある種の双方向性が目立つのである。

こうして藩内改革派の無惨な最期に刺激を受けた誠忠組の立ち上げから、名君斉彬公の御庭番としての、密使、情報収集、ネットワーク形成にいたるまでの、西郷の成長過程を概観してみると、幕末の志士のそれからして、早くも彼の独自性が際だっていることに気づかされる。

共通性は、下級武士であること、主体性と行動意欲にあふれているという一般性に認められる。しかし〈志士〉としての社会的活動領域、たとえば私塾、藩校、官学を通じての視野の拡大とネットワークの形成は、彼はほとんど体験していない。また江戸を中心に起きたあの〈剣道場〉のハブ機能とも無縁である。対して、組織化の主体性、制度改革の意欲は、通常の志士よりもかなり早く、そして強く顕れている。それはまだ襲封されていない、不遇の名君への観念的な〈忠〉として最初に表面化した。それは一八五〇年、西郷二十三歳の年で、木戸孝允は一八五五年に二十三歳だが、彼はまだ砲術、兵学を学習中である。同い年の勝は、この年ようやく翻訳方としての出仕が許された。龍馬の二十三歳は一八五八年、彼はまだ土佐と江戸の剣道場の間を往復して見識を広げている最中である．早熟の印象を与える吉田松陰も、最初の行動を起こしたのはあのペリー再来航をめぐる密航失敗で、この一八五四年に彼はすでに二十五歳だった。このように、橋本左内のような例外はあるものの、志士、あるいは幕臣の開明派は、早くて二十歳台の後半に頭角を現すのが普通だった。西郷は頭角を現したわけではないが、この主体的組織家としての才能の芽生え、その早さはやはり特筆すべきものがある。

〈誠忠組〉組織に見られる、観念的でありながら、激しく社会的な活動意欲は、勤王の志士の、やはり観念的活動志向に近いことはすでに述べた。しかし勤王にはない要素もそこにはある。勤王はともかく天皇の地位そのものに焦点を結ぶわけだが、同じような意味

で、彼は抽象的な藩主名君に忠の方向を向けるわけではない。抽象的ではあるが、〈名君〉を個別に選択する。つまりそれは当初から斉彬という実在の個人の方向を向いている。これも志士の現実においてはほとんど生じない、現実的な志向性だった。それはもちろん〈名君〉が幕末において払底していたという事情もある。しかしそれだけではない、なにか非常にアルカイックで、しかも主体的な選択がそこに働いているのを感じる。

一つのヒントとして、封建初期、まだ惣領制と開発領主制が生きていたころの〈今参り〉という伝統がある。これは主君を持たない武士（つまり浪人）、あるいは郷士、時には農民が、自分で主君を選び、その館にぶらっとやってくるという仕官の型だった。平安末期や鎌倉初期の説話文学に目立つが、おそらくそれ以前から、そしてそれ以降も実際に行われていた習俗だと思う。たとえば秀吉の仕官、自分を目立つように仕立てて、信長に売り込んだという伝説もその延長かもしれないし、井伊家の祖先、井伊直政の仕官は、はっきりと今参り型だった。目立った美男だった彼を、母が道に立たせて家康の眼につくようにしたと伝えられているからである。伝説ではあるが、しかしやはりこうした自分から君主を選ぶという習俗を背景としていると思う。

もう一つ、少し脇からのサポートだが、西洋中世の封建制にも類似の主体的な主君選択の伝統がある。この方面でいまだに規範的な価値を持つ、マルク・ブロックの『封建社会』によれば、その中核となる臣従儀礼、〈オマージュ〉は双務的なもので、臣下が保護の権利と臣従の義務を負うが、その際、ちょうどその鏡像のように、君主も支配の権利と保護の義務を負っていたことを指摘する。するとまた、日本の封建制への類推として、鎌倉武士に特徴的だった〈御恩と奉公〉の双務性が連想される。〈御恩〉は受け身のものでなく、主君の義務でもあったからである（したがって、御恩が途絶えると、御家人は四散する）。

しかしこのどれもが、西郷における斉彬選択と重なり、しかし微妙に偏差していく。われわれが西郷の〈忠〉の情念を概観して、なにか隔靴掻痒の感をいだく真の原因は、わたしはやはり時代にあったのではないかと思う。斉彬は名君であり、西郷はそれに信服し、成長したわけだが、それがすべて〈忠〉の双務性からかと西郷がもし自問したとしたら、いやどうもそうではないかもしれないと感じたのではないかと思う。ややこの解析自体が、まとを射抜いていない感はわたしも持つが、弁解させてもらうならば、真摯に時代と自己に向き合った志士たちは、この面では、つまり〈忠〉という封建的エートスのエッセンスをめぐっては、やはり西郷に似た隔靴掻痒の感覚を持ったのかもしれないとも感じる。

ここからわたしは実験的に、一気に飛躍してみたい。

このわずかな齟齬感、どのような名君でもすでに満たし得なくなった幕末的忠の情念の齟齬感は、〈等族〉が、絶対権力者に感ずる、感ずるべき双務的な〈忠〉の先駆型であり、そしてそこではじめて十全に満たされるべきものではなかったか、これがわたしの飛躍であり、仮設である。

その徴表の一つは、西郷の治人の見地からの、専制批判であると思う。つまり〈あるべき上下関係〉からする、〈現行の上下関係〉のおかしさ、その腐敗の呵責ない弾劾である。これが上で少し見ておいたように、明治初期の有司専制に対する彼の基本的なスタンスであり、大久保の開明官僚制と袂を分かつようになった、根本の原因ではないかと思う。

時代を進めて、あの決裂、征韓論での下野の前夜を観察してみよう。そこでは西郷はいわゆる〈留守政府〉の中核として、事前に大久保たちと取り交わした約束通り、明治政府の集権化を進めている。徴兵制、地租改正、教育制度の立ち上げは、すべてこの留守政府の手で進められたことが特徴的で、西郷は反対もサボタージュも行っていない。しかし彼は有司専制をすでに激しく批判し始めていた。それは維新の功業を汚すものだとすら言っている。この専制をめぐる、一見すると矛盾した言動は、彼のエートス、そして実務的な感覚では融合し、無矛盾だったとわたしは考える。そしてそこに、西南戦争にいたる一つの方向が見え隠れしているとも感じる。

少し立ち止まって検討してみよう。有司の腐敗は、一見すると単純な精神論のようにも見える。ともかくそれはこういう風に記録されている。

〈萬民の上に位する者、己を慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、職事に勤労して人民の標準となり、下民其の勤労を気の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し。〉（『西郷南洲遺訓』同上、６ｐ）

この〈上に位する者〉は官僚だが、それは封建官僚だろうか。どうやらそうではない。そこにはすでに、公僕としての〈勤労〉が前提とされているからである。しかしでは大久保が体現したような、絶対主義的開明官僚だろうか。それも違う。この〈上に立つ者〉には、合理性ではなく、品行、徳、そして克己が求められるからである。これはあの沖永良部島での講話に通じる精神であり、彼は〈君子〉と〈小人〉を峻別していたことを思い出す。すると、以下の維新政府の堕落に対する激しい怒りも、この独特の徳治的官僚制モデルからのものであることが理解されるだろう。

〈然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏へに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し戦死者に対して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける。〉（同上、６ｐ）

これは精神論、道徳論に見えて実はそうでない。実際に官僚の腐敗は早くから顕れていたし、それだけでなく、上に立つべきでない者が、能吏であるというそれだけで実権を握ると、すぐに封建的酷吏に化け変わる。これは下吏として献策を繰り返した彼の青年時代に痛感した事実だったに違いない。そのことを西郷は知悉しているがゆえに、明治政府の初期状態にどうしても納得いかなかったのだと分かる（彼は出仕を何度もこばんで帰郷しようとした）。

官尊民卑の弊風は、すでに蔓延し始めている。明治が進むと、これにお手盛りの華族制度が加わり、やはり器でない者たちの「豪傑ぶり」が始まった。昭和末期の暗い先取りである。勝はためいきまじりに、こう茶化した。

〈このごろ元勲とか何とか、自分でえらがる人たちに、こういう歌をよんでやったよ。

時ぞとて　咲きいでそめし　かえりざき　咲くと見しまに　はやも散りなん
あれらにわかるかしらん。自分で豪傑がるのは、実に見られないよ。おれらはもう年が寄った。〉（『氷川清話』、同上、１８０ｐ）

上で見たように、福沢が西南戦争の直後に、西郷を擁護し、彼は専制に対抗し、敵対したのだと評したことは、この文脈で非常に重要であると思う。何が重要かというと、これがまさに、これまでどうしても解き得ない謎だった、征韓論と民権運動の連携、連絡を裡側から理解できる鍵となりうるからである。

大久保のケースをまず考えてみよう。彼は廉直な人で、暗殺された時、借金しか残っていなかった。その意味で開明官僚の鏡である。そして集権に必要な合理的官僚制度を、最初は大蔵省、続いて内務省で造りあげた。その内務省は一つのモデルとなって、他の省庁の合理化へと波及していく。しかしすでに勝の節で述べたように、その官僚制はどこか偏頗で、江戸町奉行的なソフトな緩衝機能を失っていた。それが絶対主義的合理主義の特性だと言われればそれまでだが、しかしこの正当化は（ノーマンが大久保のために行うような正当化は）大事な点を見逃している。それは大久保が採用した官僚の誰一人として、絶対主義的に熟成していなかったということである。彼らは、近い過去において、ほとんどすべて、雄藩改革の有司たちであり、その封建的専制の気分はとても抜けきっていたとは言えない。

新進官僚の前身は、藩という狭い世界でのミニアチュアの重商主義と権力集中の実行者たち、成功者たちである。しかし絶対主義的官僚として振る舞うためには、旧藩でも、明治国家の初期にも決定的に欠けているものがある。これが、彼らが新しい時代で示す、紆余曲折、自己矛盾の根本の原因となった。それはいささか逆説的に響くかもしれないが、充実した専制体制である、絶対主義の制度そのものが欠如していた。絶対主義的近代国家が草創された以上は、君主の親政を必須とするものだった。その親政はいまだに存在しない。

藩も同じだった。藩主が親政を敷くということは、おそらく江戸初期にほとんど消滅している。それは〈戦国〉の伝統として意識された過去のものであった。幕末の雄藩でそのタイプの充実度を示す藩を探してみるとよい。それがほんとうに僅少であることにあらためて驚くだろう。斉彬ですら、全権を握った専制君主ではなかった。慶喜も、直正（鍋島直正）も、山内容堂もそうではない。みな封建的集権のミニアチュアの上での開明君主であり、そこには全面的親政のノウハウそのものが欠如している。それは、結局被統治民における絶対主義的社会組織、〈等族〉の欠落に完全に呼応した統治階層の未成熟であった。

絶対主義的体制と、〈等族〉の発展は、合わせ鏡のような連結関係、弁証法的対峙関係にある。幕藩体制も、明治初期も、この絶対主義的親政が欠如していた。したがってそこにおいては〈等族〉が育つこともなく、また両者を連結する機能を持つ、真に近代的な官僚が育つ余地もなかった。ここからして官尊民卑と〈有司専制〉という別の合わせ鏡、日本近代固有の社会病理が展開を始めることになる。

日本封建制が、〈等族〉を欠落させたまま不完全な集権制に至ったこと、ここに江戸幕藩体制の未来のなさ、その永遠の停滞の真の原因があるとわたしは考える。そしてこの認

識がまた総じて欠落してしまっていることが、日本近世研究、日本近代研究の大きな内在的瑕疵となっていることを感ぜざるをえない。いわばわれわれの歴史を見る眼そのものが、いまだに幕藩的な近世の不完全さを引きずっている。

これはヨーロッパモデルを絶対視するものではないことに注意したい。そうではなく、どのような形でも、下部構造が貨幣経済に変容すれば、社会的富が商業、重商に傾くのは普遍的進行、どこにでも見られるべき社会進化であり、その場合、農本的な土地と地代と穀物を富の本源とする純粋封建制は、内部からも外部からも解体の過程に入ること、これも必然である。そこから先は、もちろん地域、伝統と文化の要因で、無限の変奏を経ることになる。しかしその変奏は、すべて絶対主義という統治類型を辿ったであろうことは、これも普遍的に言えることである。これは逆説的だが、江戸史そのものが実証している。

つまりそこにおいては、その過程を止めようとした人工的な農本体制が、定向的に進行する自壊を続けたのであり、それは外部からの刺激、たとえば黒船を待たずとも、やがて内部からの貨幣経済化でシステム疲労、そして完全な瓦解へと至るべきものであった。富が重商的な蓄積を始めれば、当然権力も土地から離れて、貨幣を使いこなしつつ集権を勧める。絶対主義的権力への趨勢がこうして自然に生まれる。またそれと対抗して、社会勢力もまた富を蓄え、自分たちの勢力構造を外化していく。これが〈等族〉であり、〈等族〉と新たに生まれ出る権力中枢は、軍制、課税、教育（宗教を含む）を廻って、その一元化と平準化を廻って、衝突、折衝、妥協に入る。これが〈アンシャン・レジーム〉の〈等族会議〉（三部会）の段階、つまりフランス革命前夜の段階である。ここでもそれは、ヨーロッパ産の特異型ではなく、江戸期が否定的な形で（人工的な欠如態にもかかわらず芽生える絶対主義的、重商主義的解決という意味で）実証するように、普遍的な過程である。それは人類史的な背景を持つ、第二次革命（機械情報革命）の前期、その前期を用意すべき集中と平準化の産物である。

このマクロの背景から、維新革命史のあの〈速度〉と重合、縮重、そして並列からポリフォニーの発生までの全過程を改めて検証しなければならない。そうすることで初めて、大久保的官僚制度の早熟の問題性が見えてくると思う。つまりそれは、絶対主義の萌芽期において、かえってその爛熟した晩期の形態、つまり親政の行われなくなった（親政の必要がなくなった）絶対主義を先取りしたものである。そこに大久保の、そして明治絶対制の自己矛盾がある。それは専制の親政という中枢が、その全期間を通じてほぼ完全に欠落していることに明確に顕れている。

この不在、欠如は、たとえば官制と実権のズレという細部を生んだ。大久保は太政官という最高位者として、日本で実質最初の総理大臣となったのではない。最初に近代的官僚制が貫徹した省庁の統率者、つまり大蔵卿として、続いて内務卿としてだった。明治天皇が、当時まだ成年に達していなかったことがこの欠落を説明しているように見えて、実はそうではない。絶対君主制において、摂政による親政の代理、また重臣による専制の代行はむしろ常態であったからである。しかし官僚ではなく、重臣でなければならない。大久保自身は、一官僚でもなく、また重臣、摂政でもなかった。この曖昧さに、彼のめざした〈絶対主義的官僚制〉の自己矛盾が投影している。

初期官僚制の自己矛盾は、復古を標榜する〈錦旗〉の外形、シンタクスを、近代的統治において継承するという、ある意味での非常手段をとった。国権がつねに無限大の権力源泉として、抽象的に観念されていたと言い換えてもよい。そこから現実政治とのあいだに必然的に齟齬が生まれる。そしてその間隙に、国体論的神輿が、つまり家産的〈萬世一系〉のイデオロギーが入り込み、増殖することになる。それはもちろん大久保の意図ではなかったが、大久保が踏襲した、〈錦旗〉の権威構造が招いたアルカイズムであったこともたしかである。

ここまでを確認すると、あの難解な結合、征韓論と初期民権運動の結合の謎も解けると思う。つまり両者は、絶対主義的専制（あるいは君主制的絶対主義、どちらも内実は同じだが）から必然的に派生する、膨張と自己構造化の要因であり、それ以外ではありえない。

その前にもちろん、現実の、焦眉の問題としての〈士族〉問題がある。〈士族〉をなんとかして、新国家体制にソフトランディングさせねばならない。たとえば、征韓論者の江藤新平（一八三四～一八七四）は、三権分立を明治国家に導入した日本司法の祖の一人であり、フランスの民法、特にその近代国家にとっての意義を、ほぼ完璧に理解していた。その彼は、西郷、後藤、板垣と共に征韓論を唱え、士族救済をそれと結びつけ、下野すると民権と士族救済を同時に主張しながら、佐賀の乱（一八七四年四月）に果てる。彼は西郷の決起を強く期待したが、西郷はこの時は沈黙し、静止したままだった。江藤はノーマンには進歩と反動のないまぜになった、一つの典型としての明治人に見えたようである。

〈江藤の日本膨張論は何年も前に（※征韓論の前に）遡る。一八七一年に江藤は『対外策』と題する覚え書きを岩倉に提出し、日本政府は大陸に対し侵略的な政策を取るべきこと、東アジア民衆の態度を知るため使節団を派遣すべきことを力説した。……

佐賀では旧藩士族のあいだのさまざまな傾向が互いに衝突して、政治が複雑を極めていた。一八七二年に組織された征韓党があり、その名の示すように、士族反対派（※新政府への反対派の意味）の膨張論にかたまった一翼を佐賀で代表していた。この党の士族は藩首脳部の保守主義に反対し、なかには土佐で盛んだったような自由思想に動かされているものもあった。〉（ノーマン、『日本政治の封建的背景』、同上、１７０ｐｆ）

ここで佐賀はもちろん西南雄藩の一つを代表しているわけだが、新政府への参加がある程度まで浸透しながら、政府そのもの（有司専制）への反対が根強く、それが征韓と民権を包摂していたことに注意すべきである。同様の現象は、特に西南日本のあらゆる場所で観察されていた。この混乱と沸騰を江藤自身も反映している。

〈江藤自身の政治思想は改革と反動の奇妙な混合物であった。この点で、かれは日本の政治上決して異例の型ではない。江藤は、西欧の法体系を日本に導入すること、仏教僧を膨張の謀略要員として利用するように提案すること、征韓を要求すること、しかも代議制度を要求する生まれたての運動（※民権運動のこと）を支持することのあいだに、何ら矛盾を見なかった。〉（同上、１７０ｐ）

江藤の逡巡は『自由党史』でも記録されている。江藤は最初佐賀の争乱の知らせを聞き、「子弟鎮撫のため」西帰しようとした。板垣はそうすると、必ず火に油を注ぐことになる、やめなさいと忠告する。それをふりきって佐賀にもどった江藤は、案の定、叛乱の首魁とされて、処刑されてしまった（『自由党史』第二篇、第一章、９４ｐ）。わたしは、これは事実ではないかと感じる。つまり江藤は自分たちが中央でやっていることと、暴発はしたものの、郷里で「反対党」がやっていることとの間に完全に連続性を認めていたということであり、したがって「鎮撫」も可能だと考えたのだと思う。ここには〈反動〉はどこにも存在しない（この見方もノーマンの限界であることは言うまでもない）。史実の江藤には、一貫した反政府、反有司専制の主張があるだけである。

その連続性の根拠は何だろうか。わたしは〈士族〉の内面の、明治に入ってからの急速な変容ではないかと思う。そしてその変容は、江藤においても、佐賀の郷党においても、〈等族としての士族集団〉を予感したものだったと考える。彼らはすでに士農工商の士分ではない。〈四民平等〉における、均質の社会集団、〈士族〉なのである。その根拠をこれから述べよう。

〈士族反乱〉は通常、士族の既得権を守る絶望的な、退嬰的な戦いだとされることが定例となっている。しかしすでに〈四民平等〉と帯刀の廃止は明治三年に公布され、これは大きな摩擦なく受け入れられている（士族反乱側に、旧武士の格好をした者が意外と少ないのもこのためである）。廃藩置県もそうだった。そしてそれは当然秩禄処分へと連続していく。このこともすでに常識であったと考えるべきである。すると膨張論、あるいは具体的に征韓論による士族救済の実体が見えてくる。それは近代的兵制、少なくとも戊辰戦争程度の近代的軍制における、士族の雇用への欲求であって、それ以外ではない。

たとえば佐賀〈憂国党〉のような、封建制への復帰を当面のスローガンとした党派ですらそうで、それは彼等が何一つ具体的な「復帰」の方策も、手順も示せなかったことによく顕れている。したがって彼等の特権の要求も詳しく見れば、すべて軍制がらみである。〈切り捨て御免〉をもう一度やろうとしたわけではない（そうしたエクセントリシティの混入はあったろうが、それは全体の趨勢ではありえない）。つまり士族は、その大部分は、細かな上下関係のある、江戸的閥族制度に戻ろうとしたわけではない。そうではなく、一般的な〈士族〉として、他の身分との違いを際立たせつつ、新たな社会勢力になろうとしていた。少なくともその方向性ははっきりと顕れつつあったと考える。

この封建軍制のプロとしての士族が、〈等族〉を形成するための大前提は、もちろん絶対主義国家の成立である。江藤はそれに尽力した立役者の一人だった。そして〈四民平等〉下の士族は、もはや封建武士ではありえないことも知っている。だからこその膨張論である。

膨張論、つまり征韓論の内的必然性はこれまでに何度も予感されてきた。それは事実として、維新の志士のほとんどが一度は主張したという意味においても（勝も木戸も例外ではない）、その必然性が明治的絶対制の成立と内的に連関しているという直感はこれまで何度も顕れている。しかし展開することなく、研究の基軸となることなく、消えていく。これも常態だった。軍国の先駆のように見える、したがってタブー意識が働く。これが実相ではないかと思う。

もう少し別の、より普遍的な位相での解析はできないだろうか。

わたしはそれは、近代絶対主義に内在する膨張性の、日本的な顕れではなかったかと思う。つまりそれは、重商の先進性と、封建軍制の負の遺産の重合するところに必ず生じる、必然の過程である。

一度、ヨーロッパの軍制と絶対的集権の関係を概観してみるとよい。するとイギリスにおいても、フランスにおいても、ドイツにおいても、特にその草創期には、同じ問題に遭遇していたことがわかる。つまり過剰な封建軍制の負の遺産をどうやって解消、あるいは再統合するかという問題である。プロイセンも、ブルボンも、チューダーも同じ問題にぶつかった。そして同じ型の解決を見いだした。それは軍制の近代化に伴う、軍事力の一時的な膨張である。まず騎士たちを、そして騎士の従者たちを、絶対主義的、合理的軍制へと編入しなければならない。その際、彼らのそれまでのプロとしての技量は、もちろんある程度儀礼化しながらではあるが、尊重され、〈伝統〉として残ることになった。そしてもちろん、活発に、活発すぎる戦争が行われる。それは専制君主の領土相続の際に多発したことも象徴的である（したがって「継承戦争」の定型が生まれた）。絶対制の領土確定は、国民国家の領土限界と基本的に重なることが多い。そしてその際に、各国列強は封建軍政の遺産を最大限度活用する。これも絶対主義草創期の常態だった。

あまりに即物的な言い方かもしれないが、それは内在的な必然性の外化であり、侵略というよりは（実際の侵略ももちろんあるのだが）、内政的矛盾の外化である。その証左は、絶対主義が成熟し、立憲、あるいは革命に近づくにつれて、こうした膨張主義的な、そして意外と小規模で（しかし長々と続く）戦争は消えていくということである。そのかわりに登場するのは、国民戦争であり、革命戦争であるから、その大規模化は大きな問題ではあるのだが、しかしこの場合、徴兵制が浸透し（フランスの場合）、あるいは民兵制度の常備軍の代替によって（イギリスの場合）、封建的軍制の統合という難しい問題はすでに解消されている。

わかると思うのだが、こうした解析のどこにも軍国主義の讃美はない。それは客観的な歴史過程の分析であり、問題があるというなら、それは人類史そのものの、画期の制度再編をめぐるマクロの問題である。それはもちろん、問題とされねばならないが、絶対主義固有の〈非道〉ではないということである。過程はほとんど必然的であり、したがって多発し、どこにでも現象する。

征韓論が日本軍国主義の宿痾に見えるのは、あくまで大逆事件以降の歪んだ国体論、そして軍部の自立の産物であることを忘れないようにしよう。逆から見れば、もし朝鮮半島、あるいは中国の近代化が日本より先に成功していれば、そこでもだぶついた封建軍制の内部矛盾を解決する手段として、膨張主義、「征日論」が自然に発生したはずである（もしまだ日本が江戸的封建に低迷していたとして）。これは極論ではなく、類型性にもとづく推論であり、歴史の真実であると思う。

ここまで明治初年度の事態を普遍化して、ようやくその欠損と、「士族反乱」のめざしたもの、またその民権との内的結合の必然性が見えてくると思う。つまりそれは「四民平等」の近代性の上での、「等族」形成の主張を、〈士族〉の再統合の文脈において行ったものであったとわたしは考える。国民の平準化は絶対主義の時代、その後期に起きたことは

すでに見た。明治初期の四民平等政策も、ほぼ完全にこの路線に乗っている。したがってあと欠けているのは、実体的な社会勢力としての〈等族〉、ほぼそのピースだけだった。日本にはブルジョワ等族も、聖職者等族も、組織された社会勢力としては存在しなかったという主張は正しい。しかしその主張は〈士族〉に関しては正しくない。〈士族〉は封建軍制の体現者であり、また支配階級であったという意味で、この〈等族〉性をすでに内包していた。それが一気に顕れたのが、まさに〈四民平等〉となってからの明治初年度になってからだった。

つまり明治初年度の〈士族〉は、〈四民平等〉に反して現れた封建復古、その分断された門閥への回帰ではない。その逆が真だった。〈四民平等〉に内包された絶対主義的平準制を、自らの階層の上にいち早く活用したところに、〈士族〉の、〈士族〉としての平準制、社会階層が台頭するのである。平等はむしろ門閥的骨格を解体する触媒となったのだった。そしてこれも例外ではない。ヨーロッパの絶対主義の初期、強力な社会集団となったのは、まさに封建諸侯であり、またその麾下の騎士たちであった。彼らもまた、封建プロパーの分断性を捨て去ったからこそ、等質の〈王の臣民〉としての組織性を主張できたのである。

西郷の征韓論をめぐる主張と、そこに自分の最後の〈国家に対する奉公〉の場を見いだそうとする動機は、半ばはあの〈死に場を求める〉という特異に実存的な願望に沿ったものではあった。しかしまた彼の「士族」とはつまり、戊辰戦争の「官軍」であり、彼が創設に手を貸した「御親兵」の方向である。つまりそれは絶対制の職能集団であり、そこに封建軍制の職能集団を統合し、軟着陸させる、これが彼の基本的な指針であったことは間違いない。そしてそれは士族救済をめざした江藤や板垣、いな大久保たち反対派も含めて、はっきりと共有されていた観念だった。

何度も言うが、封建的武士とその閥族的拘束は、明治士族（この時代概念を新しく提唱しておきたい）自身が振り捨てたばかりの陋習そのものであり、そして士族自身が、それが終わったことに完全に満足していたのである。士族反乱がめざしたものは、有司専制の打倒、そして民権の普及だった。この不思議な結合も、民権が、特に明治初年度においては、会議の開催権、参加権と同義であり、民権の伸張そのものが、議会の権限の拡張として表象されていたことに気づけば氷解する。つまりそれは、ほとんど制度の自己塑性のように発生する、絶対主義体制から必然的に発生する、不可欠の要素としての〈等族会議〉を実体としていたのである。〈等族〉としてみれば、士族もやがて育って来る本来の民権（地主民権）も仲間であり戦友だったのである。何に対する戦友か。絶対主義的専制に対する、その恣意的な徴税と軍制に対する闘争の戦友である。そして敵は〈有司専制〉という名で、しっかりともう視界に捕らえられていた。したがって、板垣と江藤の連携も不思議ではなく、この時期、特に近かった西郷と板垣の連携も、そうした必然性に支えられていたと考えれば、整合的に理解できる。

もちろんここには、もう一つの不可欠のモメントがある。それは絶対主義専制君主自身の〈親政〉である。この型の親政が、あの家産国家的親政、〈萬世一系〉の神話的親政とはまったく異なる構造を持っていることはもちろんである（この「もちろん」が、神がかった国体論者にはまったく見えなくなっていたのだが）。それは絶対主義そのものが、すでに国家内の君主、国家機関へと収斂する君主の理念をはっきりと内包しているからであ

る。そこにおいても、神権的イデオロギーが出没することはあるが、それはいわば〈ためにする〉ものであって、国家制度全体の本質の表現ではない。国家がすでに計算と理知の産物となり始めた以上、それを自己破壊する神話と神権への後戻りは、まったく無意味なアルカイズムでしかないからである。

わたしは、西郷の先駆性は（絶対主義における先駆性は）、この親政の不可欠性を予感したことにあるのではないかと思う。それは明治天皇への接近のみを意味するものではない（それはあまりにしばしば、封建的忠誠の延長上でとらえられてきたが）。たとえば彼の〈皇国〉という言葉づかいを追跡してみるとよい。それは維新前において意外と僅少であり、明治になって次第に増加する。そしてそれはほとんどの場合、人民と直接結合されている。これが絶対主義的親政の定型なのである。親政は、国民の創出と不可分の関係にあった。それは、絶対的王権の前で、等族内での社会関係が徹底的に平準化されていくことから始まった。つまり「四民」あるいは「三部」（フランス）は、その内部において、閥族を捨て、平等となる。平等の納税者あるいは兵士となる。西郷自身の宮中改革も、御親兵の設立も、この親政の実現の方向で整合的に理解できる。そして最後に膨張論的士族の救済、つまり近代軍制への編入の課題が、「征韓論」として自覚される。

この自覚は、大久保の絶対主義官僚制の瑕疵、中核の欠落と早期の頽廃を正確に見すえたものであったと思う。板垣が初期の民権運動の目標にあげたのは、まさに有司専制から生まれる腐敗の全廃であったし、それは在野の福沢も共有する、当時の有識者全体の問題意識であった。福沢は自著の『文明論之概略』を西郷に贈り、西郷はそれを読んだ形跡がある（『福沢全集緒言』）。そこでも専制批判は徹底して行われていた。つまり有司専制とは、早熟な、あるいは偏波な絶対主義官僚制が必然的に宿す腐敗、官尊民卑からの強権官僚の出現（品川や三島たち）、そして「元勲の無駄な豪傑ぶり」までをすべて含める、制度病理だったと総括できる。

西郷の徳治もまた、たんなる精神論の文脈で抽象化するのではなく、この完成された（完成されるべき）絶対主義の光によって、新たな理解が可能になる。ブルボン王朝においても、プロイセンにおいても、またハプスブルク（オーストリア・ハンガリー）においても、その隆盛期には、かならず徳治のイデオローグたちが登場した。それは啓蒙専制君主であり、あるいはプリンツ・オイゲン公のような職能的天才であったりしたが、彼等は英雄としてふるまい、官僚制の官吏からは一段高いところに自分を置き、また彼等のカリスマ性がそれを許したのである。彼等に対する礼賛から、最初の国民国家的な意識、本当の意味での愛国心も芽生えていく。これもほぼ普遍的な現象である（フランクフルトのゲーテ家にもフリードリヒ二世のファンがいたが、それは小邦を超えた領邦民族国家ドイツへの最初の愛国心の発現でもあった）。このアングルから見れば、旧弊にすら見える西郷の徳治論も、大久保に見えなかった、見ようとすらしなかった、絶対主義的統治に必要なピース、不可欠のピースとしての、統治者とその輔佐役に要求されるカリスマ性を見すえたものだったと言えるかもしれない。わたしはなぜかそう感じる。

しかしもちろん、いつものことだが、ここでも〈速度〉と縮重が、日本近代の必然として作用する。日本近代の始まりを告げる絶対主義は、早熟のまま、しかし民権運動の急速な成熟により、立憲過程を迎え、そして調整と妥協の産物としての帝国憲法公布へと至る。

それ以降は憲政史であり、立憲君主制において、すでに（制度的に）絶対主義は克服されている。実現しなかった西郷の天皇親政の夢も、実現した大久保の、〈錦旗〉をともなう官僚絶対制も、すでに過去のものとなっている。過去のものとなるべき時代である。

しかしこの時代まで、この近代国家の完成期まで、もし西郷の〈静止〉が続いていたらどうなっていただろうか。そうわたしはふと想像してしまう。西郷は萩の乱、佐賀の乱に同調しなかった。はっきりと私学生の決起を抑えていた。もしこの方向で、憲法発布を迎えていれば……あるいは彼のもとで〈等族〉化した全国の士族は、一部は近代軍制のプロフェッショナルへと転生し、一部は〈士族党〉の代議士として議会に登場したかもしれない。それは立憲制のもとでの、等族的集団であるから、かなりアナクロニズム的な様相を呈しただろうが……そういう集団なら、プロイセンにもフランスにすらいた。そして立憲制はそれら〈超保守派〉を包含しうる強靭さと柔軟性を十分に備えていた。日本の憲政ももしそこまで成熟したとしたら……少なくとも西南戦争はまったく必要なかったはずである。そしてそれが西郷のめざしたところだとしたら、それも明確な〈愛人〉の表現として記憶されたかもしれない……

わたしの空想もここまでである。

西南戦争は暴発した。そして西郷は、〈もうここいらでよか〉という言葉を残して果てた。

解決されない問題はしかし残った。〈等族〉の、自律的社会勢力の欠落した絶対主義、そしてそこから出発した、出発せざるをえなかった日本近代の歪みである。

その歪みは、あるいはわたしたちのこの戦後社会にまで達しているかもしれない。

そう思うとき、わたしは、西郷の〈至誠〉とその〈愛人〉の果たせなかった大きな夢の名残のようなものを、わたしの心にはっきりと感じるのである。

（近代本論第二十一回テクスト終わり）